



大いなる日に

燃えあがる緑の木 第三部

大江健三郎



新潮社

大いなる日に

燃えあがる緑の木 第三部



一九九五年三月三〇日 発行

著者 おおえけんざぶろう
大江健三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話 営業部〇三・三三六六五一一

編集部〇三・三三六六五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章	『アウグスチヌス「告白」講義』	5
第二章	神は不幸の苦しみ慰さめない	45
第三章	絞首台の諸譚 ギヤロウズ・ビュ・マ	83
第四章	担い・背負い・救い出す	119
第五章	五百人以上の兄弟に同時に	157
第六章	七十歳の両性具 アンドロジナス 有者	205
第七章	魂の暗夜	245
第八章	分裂	285
終章	大いなる日、義 た しい者らの行進	327

装帧·司修

大いなる日に

—— 燃えあがる緑の木 第三部 ——

第一章 『アウグスチヌス「告白」講義』

「燃えあがる緑の木」の教会から、そしてこの森のなかの土地から私が出て行くまで、出発の意志こそ一瞬のうちに固まったけれど、実際には五日間が必要だった。その間、足を痛めている私は倉の二階で寝たり起きたりだったが、胸の内には激しく動くものがあつたのだ。しばしば私はオセツチャンが「屋敷」を出ようとして、それも、二度にわたって練りひろげた弁説を、再現してみた。荒さんは、K伯父さんが故郷を舞台に書いた小説をじつによく読み込んで、実際には短期の地形調査をされただけなのに、ここで生き死にする人間の心の動きを深く捉えられている。その建築家としての地形学^{トポロジ}によれば、谷間から出て行くことはすべて生命に向かつての行為なのだ。Hallelui!

倉でこの土地からの出発とその向こうにあるものをあれこれ思い描いている間、ミツが倉を訪れて食事の世話をしてくれた。彼女にも、身体の間で Hallelui! と歌っているような、昂揚した気分を感じとられたものだ。ボーカー・フェイスで隠しとおそうとしていたけれど。

私が「屋敷」を出て行く以上、それ以後はギー兄さんを介添えて教会活動の最前線に立つの

はミツの役割にちがいない。全力をふるって、教会の活動を加速させ・充実させることが、ミツにはさらなる喜びとなることだろう。ギー兄さんが糾弾された日の夜、彼女は私に、あの人が殴られている間どこに潜んでいたのかと涙声でなじったものだ。このところあらためてミツには、私がギー兄さんの活動に熱心な伴走者でないという思いが募っていたのではないか？

むしろ私はミツがああ糾弾の日よりも激しく批判してくることすら、予期していたのだ。教会員で満ちている礼拝堂で、すべての気力と体力を失ってしまったギー兄さんを、私が見棄てる振る舞いに出たことについて。あの日ギー兄さんから背き去ったのは私ひとり、それに倣う者は誰もいなかったのはあるが、それでも教会員の団結のために私の振る舞いがいかに不適當であったかと、ミツは私を責めることができたはずだ。

しかしミツはそれにふれることはしないで、食事のみならず親身に世話をしてくれた。彼女がギー兄さんの名を出したのは、一度だけ。それも私の反応を見て、唇から出たばかりの言葉を自分で掻き消す身振りをしていた。――踵の腫れてるところに、指と掌の治療を受けたら楽になるのじゃない？ ギー兄さんがもとに戻られたら……

その後、ミツは徳田医師に連絡して私の足を診に来てもらってくれた。

――踵が良くなりしだいきみが「屋敷」から出て行くとして、おれはそれを早める方向にサーヴィスするほかないんだけれども、サッチャン、やっぱり出て行くかい？

ミツの案内で倉の二階に上って来て、彼女に湯の準備をさせながら、徳田医師はまずこちらの人格の中心が足にあるように対処された。その上で徳田医師は、さて、と私の上半身に向きなおって言葉をかけられたわけなのだ。

階段の降り口すぐ脇に両膝をついた待機の姿勢のまま、ミツが私を見ていた。徳田医師のために彼女のなしうる仕事は終っていたから、教会の人間としての情報収集をころがけて、ということであつただろう。私としては教会の誰にも、これからの自分の行動について秘密にしておかねばならぬ理由はなかつたけれど。

——出て行くわ。「オンナオトコ」から「オトコオンナ」へと劇的な自己改造をしたわりに、生きる場所としては狭い範囲に限ってきたのでね、これからそのようでない所に行きたい。

——おれの若い頃さ、自分の可能性をためしてみたい、という世代的なクリシェがあつて、それは無計画に外国へ出て行く、ということだつたけれども…… サッチャンの性格ならば、やること、できることの範囲はしっかり見定めて、ということだろうなあ。

——そうじゃないのよ。積極的になにをするか、ということとは少しも考えていない。ただ、出て行くだけ。これまでやらなかつた・やれなかつたことはなんでもやろう、と子供じみたことを考えているだけ。……さしずめ、東京へ出て行くわ。

——ザッカリーが全日空の松山―東京間回数券を使つてるので、ひと綴じ分の最後の回を提供するといつてました、とミツが遠慮しながら必要なことはいつていた。

——あ、きみ、まだ居たの？ ……どういうわけかきみもターも、サッチャンが教会から出て行くことにドライだね。今もつておれには、そうするほかないのかと未練が残るんだがな……

あの日、後で泉さんのしたコメントが、若い人たちには、てきめん、説得的だつたわけだねえ。

ミツは階段を降りて行き、私は徳田医師から泉さんの話の内容を聞いた。てんかんを起こしたアレクサンダー大王を囲むように背を向けて、ギー兄さんを囲んだニグロ・スピリチュアルズの

合唱は、延々と続いていたということだ。教会の仲間たちに説教しうるまで、ギー兄さんが元気を恢復することがすぐには望めそうにない以上、この場をどのように收拾するかは、徳田医師をふくめ教会の幹部たちが思いなやんでいた課題だった。そこには二百名もの教会のメンバーが居たのだから。

そこで無言の要請に応えるように、泉さんがあらためて口を開かれたのだ。泉さんは、腕を組んだ緊密な円陣から脱け出して、ピアノの脇に歩み寄ると——アンコールにでも応えるように、と徳田医師は表現した——教会の仲間たちにくう話しかけられた。

——ギー兄さんは、ゆっくり恢復されるでしょう。私たちの世界では、この二十年ほどのケースでもイタリアのピアノストの例があつたわ、それは長期の病気でしただけ。秀れた人が病まれる場合、病み始められた際の水位から高いところへ傾斜を登るように、恢復されると思います。ギー兄さんもそうじゃないかしら。この人を見ているとね、病むについても恢復するについても、やはり特別な力を持つていられる人、と信じられますから。

それはね、ギー兄さんの苦しみが、かならずしも私たちみな経験するものより高い、あるいは深いものだ、というのじゃないんですよ。私たちにも降りかかってくる苦しみじゃないか、と思えるようなものを、しかし私たちより先行して生きてくださってるんだと思います。いまのところ、かれをそっとしといてあげましょう。ギー兄さんが恢復されてから、この経験がかれにもたらしした言葉を聞くのを心から楽しみにしていきましょう。

それからね、もうひとりの人についても、私はやはり彼女が進んで行くコースのまま、そっとしておきたいんです。サッチャンのことです。あの人は私たちみんなの呼びかけに応じないで、

わざわざ窓から湖の側に跳びおりて出て行ってしまいました。あれは、しつかり意味をこめての行動でしょう。サッチャンも本当によく考えて、決断して、そのように生きる、という人じゃないですか？ 衝動的にああいうことをしたのではないと思います。あの人のこともね、私たちの所へ帰って来られる機が熟するまで、追いかけて行って問いつめるようなことはしないでいましょう。

それでは皆さん、もう私たちに歌える歌もないことだし、それぞれ、ギー兄さんに背を向けた姿勢のままで、ここから出て行きませんか？ 私はそうします。勝手にしゃべらせていただいて、ありがとうございます。

かならずしも、すべての教会員がギー兄さんに背を向けたまま礼拝堂を出て行ったのではなかったが——徳田医師は自分も最後の方で人の流れにしたがいながら、ミツとターがギー兄さんを扶け起して椅子に掛けさせる、憐れなような様子を振りかえって、もの寂しい気分だった——退去はスムーズになされた。

——そういうわけで、おれもサッチャンに説明を受けようとは思わない。ターから頼まれてきた伝言はこういうことね。これまできみが事務所で行っていた仕事は、かれが引き継ぐ。難しいところは亀井さんに助けてもらって。事務所にあるきみの本やノートの類は、今日のうちにも倉の上り端に届けておく、と……

あれからギー兄さんは、カジの死んだ病室に閉じこもったきりだそうだ。まあ、サッチャンは自分のやりたいようにやってみればいいと思うよ。きみの人生の問題なんだから。おれが滑稽な若気のいたりということで、演劇青年をやった時分にね、ギリシア語を教わってさ。その

成句自体はもう忘れたけども、まず行為があつて、次に受苦があつて、そして認識があるという……これがギリシア悲劇の基本だ、という話だったよ。

その翌朝には「屋敷」を出るという夜、アサさんが倉に訪ねて来られた時にも、この言葉の話が出た。徳田医師は、私を診た帰りにわざわざアサさんの家に寄つて、自分はサッチャンに聞いたふうなことをいうたが、思いつきなやから忘れてもらつてくれ、と言いついてゆかれた、というのだった。

——私には意味がよく把握されないけれど、とても良い言葉のようじゃないの。サッチャンが「屋敷」を出て行くのがきつ、かけで、徳田先生も昔のことを思い出したのやねえ、とアサさんはおかしさを誘われながら笑うことは抑制する様子で話された。かれの演劇の先生は、さきのギー兄さんと暮していた、新劇の女優さんだったのね。徳田青年は、彼女が「屋敷」から出て行くのを手伝つたんだわ。ところが女優さんは、連れ戻そうとしたさきのギー兄さんに殺されてしまつた……ともかく裁判でも、そういうことになつたんだわ。

アサさんは、亀井さんと話し合つて、工場および農場の利益のなかから私への分配金を持つて来てくださつていた。その時の私は、あらためて書くが、理由もなく攻撃的なほど自己中心的な気持を固めていたので、それを受けとることに遠慮しなかった。アサさんは、東京へ出ればまずK伯父さんを訪ねるように、教会で起つたことのおおよそは電話でつたえてあるから、あなたの気持に負担になるような質問はしないはずだし、ともいわれた。

アサさん自身、私が「屋敷」を出て行く動機ということについてあらためて質問はされないのだった。それは糾弾の直後、「救い主」として期待される生き方を棄てるようギー兄さんを説得

したのに——それをあの人が受け入れた、と考えて喜ばれた仕方でもアサさんらしかったが——、やはりギー兄さんの治療能力ヒーリング・パワーに頼ってゆきたいという母子が現われると、すぐにかれが態度をもとに戻した際の、あっさりした断念を思い出させた。K伯父さんが、——アサは实际的に無用なことはいいたり・したりしない人だから、と別の機会にいわれたことも。

それに結んで考えれば、アサさんが私にこれからなにをやりたいのか、と問われないことには意味があるのだ。そう尋ねても、私に実のあることはなにも答えられないことをアサさんは見抜いていられて、つまり实际的に無用なことはされないのだった。もつとも、必要なことを忘れることはないアサさんは、私に自分の前で歩いて見せるようにいわれ、踵の恢復を認めてから、——それじゃ、元気でね、と勢いよくいつて帰って行かれた。

私には松山空港まで車が必要だった。しかし、運転役に教会の誰かかを想像すると憂鬱なのだ。車のなかの一時半から二時間ほど、話をしないわけにはゆかないはずだから。それがミツであれ、ターであれ、ザッカリーであってすらも、私にはいま、それだけの時間、かれらと話すことはないと感じられたのだ。とうとう出発する段になって、ターが準備してくれた教会のランドローヴァーの脇に立っていたのは、これまでに見かけたことはあるけれど、直接話したことはない若者で、ウールのチェックのシャツに洒落れたブルオーヴァーを引っかけていた。

ターと一緒に車まで荷物を運んでくれたミツに質ねて、青年が横浜環境科学研究センターの植生学研究室にいる人だと教えられた。亀井さんの甥。一昨日から「屋敷」に滞在している。目的は、その専門研究にも関わっているのだが、亀井さんからの資金援助で『真木町の植生』という本をまとめるため、ということだ。亀井さんは土地をゴルフ場業者に売ったことに罪悪感を抱い

ている。この森のなかの土地についてその研究を行い、やがてその植生をかつての黄金時代に戻す布石したい意向。

——私はその調査計画を知らなかったわ。教会はドンドン新しい展開をしてるのね。

——そのように大仰なことじゃありませんけど、あなたが教会に帰って来られるのが遅れるとすれば、私たちが努力しておかなければならないから……

ミツは、これまでの私の位置に置き替る意気込みを無邪気に現しているわけなのだ。後部座席に荷物を丹念に積み込んでくれたターは、それまでずっと私から顔をそむけて黙って立ち働いていたのだが、なにもかも終ってから、工場脇の電気のメーターの上に載せてあった大判の茶封筒を私に手渡した。

——後で見てください、これまで自分が撮ってきた写真から、サッチャンが写っている分を引き伸ばしておいたから。

——そういえば、ターはプロのカメラマンの助手だったものね、と私はいったのだ。

車が大橋を渡って、旧鹽村地域を見渡せる県道を走り始めた時、すぐにも私は青年が運転者として選ばれた理由を了解することになった。

——いま左にウラジログシ群落を通り過ぎましたが、あのあたりで海拔五百メートルほどですね、とかれは説明したから。

さらに運転しながら、青年は道路の両脇に、あるいはそこを越えて植生の個性的な特質を示す群落が見出されるたび、いかにもニュートラルな話しぶりながら、その名を告げた。北軽井沢からの帰り、こちらの植物知識の貧しさを見抜いたザッカリーが、この際、教育的配慮をしてくれ

たのではないか？ 出発までとうとう姿を見せなかった人たちをふくめて、教会内外の様ざまな人たちの配慮をこうむって、私は森のなかの土地から出て行ったわけだ。

ホソバカナワラビースダジイ群落、ムクノキ・エノキ群落、シラカシ群落、スギ植林、クヌギ植林、コジイ萌芽林、……と私はカー・ラジオのFMで音楽を聴いている感じで、青年の声音に耳をかたむけていた。そのうち犬寄峠の隧道を過ぎて、平野へ向けて降り始めると、私たちの土地と決定的に違うはずはない植生に青年は関心を示さなくなった。実地に自分で調査した樹木についてでなければ、発言することに意味がない、という考えなのかも知れない。私はこの青年に空港まで送られたことに感謝する気持を抱いていた。

手荷物検査を受けていた時、私は、自分に向けられる視線をことさら強く感じた。それはチェック・インしたカウンター前でも気にかげざるをえなかったものだ。機内への案内が始まったところで、香水の香りの壁がまず進路を遮断して、それから香りの主が毛皮コートの半身をユラリと私の前にかたむけると、

——きれいな人なのに、と語りかけてきた。自分のことを本当に評価してくれる男を知らないのでしょ？ そういう相手もね、探せばいるものなのよ。

私には応待の仕様もなく、女性がスーバー・シート乗客のための通路へ進んで行くのを黙って見送った。その段になって、当の女性が四十代も後半の男性であることに気づいてもいたのだ。それもK伯父さんと同年輩でシャンソン歌手や新種の女形として活躍した人や、テレヴィのニュース・ショーで見るゲイバーの主人という手合とは違う、落着いた生活感と切迫した異様さの混在したタイプ。私は、預けたばかりの手荷物のかわりに、悲哀の重荷を手渡された具合だった。

ありうる未来の自分の面影にニアミスしたようにも感じたから。

羽田空港で、荷物の出て来るベルトを取り巻く乗客のなかに立っている時にも、やはり香水の匂いの塊りを先行させる仕方でその人が私の脇に立った。身長は私より低いのだが——それも極端に高いヒールの靴をはいて——妙に恩賜的に高みからするやり方で、彼女Ⅱかれは大きめの名刺をくれた。それから一般乗客より早く届けられたスーツケースを、出迎えの若者に運ばせて歩き去った。

踵の恢復はまだ充分でなかった。つまりその足の側を支点にして力をいれることは無理だった。ゴムをかぶせた小さな車輪のついているトランクを押していたのだが、それも片手にポストンバッグを提げながらなので、いくら何でも段差のあるところでは厄介なことになった。タクシーに乗る際も、荷物は運転手の世話をあおぐほかなかった。空港を出ると、そのなかに包み込まれる大都市の空気は耐えがたく感じられもした——ザッカリーと北軽井沢へ短い旅に出て、伊丹空港で乗り換えた時には、むしろさらに濁っていた空気を解放感とともに受け入れたのに——。

私は、自分を外側から囲むものと、内側の肉体的な属性そのものとの衝突を感じていた——生理的な期間が始まって——。渋滞する高速道路のタクシーのなかで、私はあきらかな対象のない憤懣に耐えぬ具合になり、そのうちアサさんの勧告にしたがってK伯父さんの家に向かっていること自体を、憤懣の種子に数えかねなかった。

私はK伯父さんから、いま現在、役に立つことを教えられると期待して、成城学園前に向かっているとは思わなかった。それでいて、私はさしあたって読む本をK伯父さんに選んでもらうつ